

## 太鼓名を創る論理、伝える論理

今回も、キャリントン [Carrington, J. F., *Talking Drums of Africa*, 1949] に拠りながら、太鼓名の考察を続けよう。

## ■男性と女性

太鼓言葉をもつ社会の男性は、全員が太鼓名をもっていた。コンゴのキサングニ近辺では、イニシエーションなどの特別の儀礼を機に、或いはロケレ人の場合のように太鼓言葉を解せるようになる（つまり、概ね5、6歳の頃）、男性には太鼓名を与えた。特に、ムボレ森一帯では、幼い時に付けた太鼓名を、イニシエーションを終えた直後に別の太鼓名に変えた。

一方女性は、既婚・未婚を問わず、特別の太鼓名をもっていなかった。前回紹介した通り、ロケレ人（ケレ語）の太鼓言葉では、娘という語は「あの娘は漁網の所には行かないだろう」（*boseka botilakende linginda*）という回りくどい表現になる。そして、どの娘も、この後に父親の名前に「～の」（*lya～*）を加えた太鼓名で呼ばれたのである。

既婚の女性は、無論、夫からみれば妻である。妻は、ロケレの太鼓言葉では *bokali la balanga* となる。*bokali la balanga* の正確な語義は不明だが、*bokali* は妻（*wali*）の古語と解せ、*balanga* はヤム芋だから、全体の直訳は「ヤム芋の妻」とでもなろう。要するに、これは「料理にいそしむ妻」といった語感をもつ表現で、妻を指す口語の *wali*、または *bokali* の声調上の多くの「同音異義語」から、この語形で区別しているのだ。そして、既婚女性は、*bokali la balanga* の後に夫の名前に「～の」（*wa～*）を加えた太鼓名で呼ばれた。

すると、次のようにいえよう。ロケレでは、アフリカの他の多くの社会と同様、女性は統合

的な人格としてよりは、未婚なら娘として、既婚なら妻としての役割によって存在を認知されていた。即ち、集団間の政治的な連帯関係を創りだし、それを維持する紐帯としての婚姻制度の媒介者として重視されたのだ。太鼓言葉は、この事実を明確に浮かび上がらせるのである。

## ■太鼓名の構成

さて、同地域の男性の太鼓名は3つの部分からなる。最初の部分は、彼の特性を示す太鼓名。これをAとする。Aには、彼の父親の特性を示す太鼓名（すなわち、父親にとってのA）が続く。これをBとする。そしてBの後には、彼の母親が婚出して来た村の太鼓名が添えられる。この最後の部分をCとしよう。（ただし、BとCは順序が逆の場合もあった）。

すると太鼓名は、異母兄弟であればCの部分だけが、同母兄弟ならBとCの部分と同じになる。つまり、太鼓名は各音節の声調の高低を二者択一的に伝達するのみであるがゆえに回りくどい表現になる構造的な制約のゆえに、逆に口頭の名前以上の情報を伝える一面ももつのだ。ただし、太鼓名も口頭の名前と同様に、Aだけを用いるのが普通だった。

キャリントンは、ロケレ人のヤフォロ村のトーキング・ドラム造りである、ボイエレを例として、太鼓名の構成を具体的に説明している。彼の場合、Aが *loola lokoki*（毒が消えることのないスピitting・コブラ）、Bが *bolemba ko la yete ya likonga*（槍を手にした悪霊）、Cが *bato baaka la loola lokoki lwa bainatede*（毒が消えることのないスピitting・コブラのように、[バ] エナ人に繋がる人々；つまりヤンゴンデ村）である。

さらに、実際には、AとBの間には「～の息

子」を意味する *litianga kiekio lya* または *bolongo la* が、また B と C の間には「母の村である〜の」を意味する *bokana wa* が挿入されている——ただし、後者は簡潔に *wa* や *la* で往々代用する。つまり、ボイエレの太鼓名は、*Loola lokoki, bolongo la bolemba ko la yete ya likonga bokana wa bato, baaka la loola lokoki lwa bainatede* などである。

### ■太鼓名の相続

ボイエレの父リトゥマニヤも、父方の祖父パオファも、ヤフォロ村のトーキング・ドラム造りの職人だった。ボイエレは、太鼓名の A の部分（毒が消えることのないスッピッティング・コブラ）を祖父パオファから受け継いだ。

ボイエレの小学生の息子  $\alpha$  は、ボイエレ同様、太鼓名の A の部分を父方の祖父から相続した。ただ、ボイエレとは異なり、彼の息子は口語の名前もまた父方の祖父から相続していた。つまり、彼の口語の名前は、祖父と全く同じリトゥマニヤだったのである。

$\alpha$  の太鼓名は、先に示した構成法からわかる通り、A が「槍を手にした悪霊」、B が父親ボイエレにとっての A である「毒が消えることのないスッピッティング・コブラ」である。すなわち、かくして、A と B の部分については、父方の祖父リトゥマニヤの太鼓名と全く同じなのだ。ただし、二人の母親が別の村から嫁いでいたので、C の部分だけは異なっていた。

ところで、先に、太鼓名の A は個人の特徴を示す部分だと述べた。だが、この例からも明らかな通り、A の部分が本人の特徴を叙述しているとも限らない。特に、太鼓言語が比較的新しい時期に他民族から導入されたのではなく、社会に深く根を張った制度となっているロケレのような人間集団の場合には、A の部分は父系氏族の男性先祖から相続されたのである。

前回紹介した、[バ] ムボレ人のメネコンゲも、A、B、C の 3 つの部分からなる太鼓名をもっていた。[バ] ムボレ人はバントゥ語系のモンゴ諸民族の一派で、木村大治氏が調査したボ

ンガンド人にごく近縁の人々である。

### ■太鼓名を創る

ところで、キャリントンは、*Kuloge e'dwa'be osongo tene*（白人の街では力が無効になる）という、ミッションの農場監督でムバエ人であるエクブクの太鼓名を挙げている。その含意は「仲間のアフリカ人の目にはどんなに力があるように見えようとも、お前の力は白人の前では物の数にも入らない」であり、明らかに植民地化後に作られた名前だという。

ムバエ人は、ナイル・サハラ語族の中央スーダン諸語を話すが、バントゥ語系の諸民族の間に交じって住んでいる。彼らは土地の新来者で、太鼓言語も周囲のバントゥ語系の民族から導入した、とキャリントンは考えている。

一方、バントゥ語系の人々の事情は、キャリントンが太鼓名を得ようとした、次のエピソードからよく窺える。

多くの人々は声調言語以外の言語を知らず、ヨーロッパ人は太鼓言語を使わないので、自分も父親も太鼓名をもっていないと彼がいくら説明しても、信じようとしなかった。それどころか、ベルギーの太鼓言語の事情を秘匿しようとしているのだと誤解した。

初期のミSSIONナリーなど、白人が、最近亡くなった民族のリーダーの太鼓名を貰う例はあった。だが、キャリントンの住んでいたヤスク地区ではそうした慣行が既に廃れていた。彼が漸く太鼓名を得たのは、彼の父親がカントリー・ダンスの踊り手だったと告げ後だった。

それは、*Bosongo olimo ko nda lokonda ekese olongo lolikalika likolo ko nda use, bato ba oki koseke twelo caa caa, bakenene ko nda onoko wa olongo lolikakika* という名前だった。その意味は、「踊れば空に舞い上がる白人、村の男たちはハ！ハ！と笑おう、踊り手の口の痛み」である。彼は踊りのもつニュアンスの解釈の違いに大いに戸惑う一方、この名前にはアフリカの踊りの雰囲気がよく出ているとも述べている。

（こんま とおる 神奈川大学 社会人類学）